

(様式第1号)

平成25年度 第3回芦屋市社会教育委員の会議 会議録

日時	平成25年10月17日(木) 15:00~17:00
場所	北館4階 教育委員会室
出席者	議長 安東 由則 副議長 海土 美雪 委員 西田 俊一 委員 野村 克彦 委員 守上 三奈子 委員 金木 友子
欠席者	委員 中村 整七
事務局	社会教育部長 中村 尚代 生涯学習課長 長岡 一美 生涯学習課管理係長 北條 安希 生涯学習課管理係 北詰 真衣
会議の公表	■ 公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

(1) 開会

(2) 議題

ア 平成25年度阪神南地区社会教育委員協議会第1回役員会(総会)について(報告)

イ 平成25年度近畿地区社会教育研究大会和歌山大会について(報告)

ウ 社会教育関係団体の新規登録について(報告)

エ 教育委員との意見交換会を終えて

オ その他

(3) 今後の日程

(4) 閉会

2 提出資料

(1) レジメ

(2) 平成25年度阪神南地区社会教育委員協議会第1回役員会(総会)資料

(3) 「原発をなくそう芦屋連絡会」チラシ

(4) 教育委員と社会教育委員の意見交換会 主な意見

3 審議内容

<安東議長>

それでは、議題1の平成25年度阪神南地区社会教育委員協議会第1回役員会（総会）の報告について事務局からお願いします。

<事務局：北條>

資料「平成25年度阪神南地区社会教育委員協議会第1回役員会（総会）」をご覧ください。

平成25年7月29日14時から尼崎市立教育総合センターにて役員会、総会が行われました。芦屋市からは海士副議長、事務局から北詰、北條が出席いたしました。総会においては、昨年度の事業及び会計の報告、今年度の役員、今年度の事業及び会計の計画について話がありました。資料の表紙裏に出席者名簿、1ページ目に総会の議事・進行、2ページ目に昨年度の事業報告、3ページ目に決算、4ページ目に25年度役員、5ページ目には今年度の事業計画、6ページ目に今年度予算、7ページ目以降に各市の役員名簿が記載されております。

役員会においては、主に今年度の研修会をどのようなものにするのかというような事が話し合われました。11月28日（木）に尼崎市立中央図書館において「まちづくりにおける市民の成長と社会教育への期待」をテーマに講演会が行われることとなりましたので、委員の皆様はご参加ください。以上です。

<安東議長>

ただいまの報告から、何かご質問ございますでしょうか。

<安東議長>

それでは、続いて議題2の平成25年度近畿地区社会教育研究大会和歌山大会の報告について、事務局からお願いします。

<事務局：北詰>

平成25年9月5日（木）に和歌山県県民文化会館にて開催されました、近畿地区社会教育研究大会和歌山大会に、安東議長、海士副議長、守上委員と事務局から北詰が参加させて頂きました。研究主題として「つながりを築く社会教育のあり方」、副題として「今、社会教育委員に求められること」とした研究大会でした。午前中は全体会となっており、南方熊楠顕彰館館長の濱岸宏一氏を講師に、「南方熊楠の生涯」という題目で講演会をお聞きしました。午後からは5つの分科会に分かれて討議が行われました。安東議長と海士副議長は地域づくりをテーマといたしました分科会に、北詰と守上委員は家庭教育支援をテーマにした分科会に出席いたしました。

家庭教育の討議の報告としましては、福祉と社会教育の連携に重きを置いたような内容

でした。問題がある家庭に市から任命を受けた地域の支援員が入り、学校と家庭と地域と行政をつないで、地域の活性化と地域全体の信頼関係の回復をはかった事例について発表を聞き、福祉と社会教育の連携が今とても必要であり、重要であるということについて考えさせられました。社会教育はとても幅広く、市民が学習したことを市民に伝え、学習したことを深めていくという、循環社会としての側面も大事ですが、助けが必要な人に地域として関り、学校や家族とは違う側面で地域として関わるといふ福祉の側面も今非常に大事になっているということについて学びました。報告は以上です。

<安東議長>

参加された委員の方からも一言ずつお願いします。

<守上委員>

しんどさを持っている家庭をどう支援するかという話をお聞きしました。一つの例として、3人のお子さんをお持ちのお母さんが、夜も仕事をされており、3人の子ども達は親がいないので夜中遊んで朝学校に行けない、そんな事が積み重なって不登校になっているようなご家庭の話でした。そのご家庭に初めて訪問したら、戸を開けた途端ゴミがいっぱい、子ども達に学校へ行こうと言っても、まずはその中からランドセルを探さなければならぬ、これではとても学校に行けない、というようなところから始まりました。お母さんも、学校からも非難されているし、又非難をしに来たのだらうと感じられます。ここをどう解きほぐしていくか、まずは信頼関係を少しずつ作っていったという成功事例をお聞きしましたが、色んな失敗事例もあるということでした。とても興味深い話で、行ってよかったと思います。

<海士副議長>

公民館の事業として地域とどう繋がるかという話でした。具体的にはシニアのグループが登録され、活動を色々と地域に展開されているという成功事例のお話だったのですが、他のグループが追従してこない、他のグループと地域をどう結びつけるのが課題ですと、はっきり課題もおっしゃっておられました。公民館事業と地域がどうつながるかという、もう少し大きな目的を自分たちで工夫して目指していきたいということでした。成功事例だけ聞いて終わりではなくて、課題についてもしっかりと認識されているのがよかったと思います。

それから全体会の、熊楠さんという人物的にも魅力がある人なんです、社会教育との結びつきがわかりにくいものでした。話としては面白かったのですが、せっかく社会教育委員の方で来られているので、それがどう反映されているか、この人の生き方にどの様なことを学ぶかというのが入ればよかったかなという気がしました。

<安東議長>

私も同じ分科会に参加しました。オーソドックスですが、公民館を中心に地域を盛り上げるために自分たちで課題を見つけて活動されているということ、市役所のOBの方が発表されていました。大きな課題としてはどうそれをつないでいくのか、自分たちがいなくなった後、次がなかなか出てこないということで、どこも同じ課題ではありますが、与えられた生活資源の中で、自分たちでどう努力していくのが大事になってくると思います。しかし、その市に住み市役所の中におり事業もよく知っており地縁もあるという人が中心になってやっていくというのも大事な点だと思いました。

他の皆様方からご意見などありますでしょうか。

それでは、これで第2の議題は終わります、続いて第3の議題に移りたいと思います。社会教育関係団体の新規登録について、事務局からお願いします。

<事務局：北條>

前回第2回の社会教育委員の会議におきまして、6月に新規の申請のありました社会教育関係団体の新規登録についてのご意見を頂戴しました。

いただいたご意見に基づき、「原発をなくそう芦屋連絡会」について、「会の主旨を再度確認すること」そして「芦屋市社会教育関係団体の登録に関する規則や要領等で、特定の考えを支持するという団体を承認しないとできるかということ」について事務局で確認をするということになっていたかと思えます。会の主旨を確認させていただきましたところ、広く市民とともに原発について学ぶということでもございました。

また、現在の社会教育関係団体の登録に関する規則等におきましては、特定の考えを支持する団体であるということをもってのみでは承認できない理由にはならない、ということも市の法制担当の方にも確認をとりました。

したがって、申請のあった6団体について、教育委員会に提出し、承認されましたのでご報告いたします。添付資料としてつけておりますが、これが「原発をなくそう芦屋連絡会」からその後に提出のあった、勉強会についての案内の資料です。承認をして承認書を交付します時に、今後も案内文や配布物があった時には提出いただくように確認をしており、今後も見守っていかねばいけないというところでは確認をしております。以上です。

<安東議長>

ただいまの報告から、ご意見等ございますでしょうか。

<西田委員>

前回の委員会で、名前のところ明らかに「なくそう」という意思表示になると思った

ので、承認に条件をつけたのですが、教育委員会の方で承認されたのですね。
我々が指定管理させて頂いている施設においても、社会教育登録団体だったら事業や減免
に対して窓口で何も言えないですよ。ただ単に施設を利用するためだけに社会教育登録
団体になりたいという団体は、本音のところであると思います。だからなぜ芦屋市だけ登
録団体がこれだけ多いかというのが断れないからということであると、芦屋市のいろい
ろな団体にも影響を与えるのではないですか。やっぱりここでもう少し精査しないと、今後
ここで承認されているのに何でダメなのかと言われたら断れないことが出てくると思
います。

原発をなくそうということに対して個人的には賛成か反対かというのは言いたくない
ですが、名前はやっぱり重要で、本当に勉強することが主旨であれば原発を考えようとか
いう様な名前にしてほしい意向があったのですが、通らなかったのですね。

<事務局：北條>

そうですね。団体に対して、名前を変えなさいという指導はできないということは前回
にもお伝えしたかと思いますが、団体に活動の主旨を確認する際にそういう意見が出てい
るということはお伝えしました。

<西田委員>

市としてはそうなのでしょうけど、社会教育委員会の中でこれは反対だったという意
思としては伝えてありますか。

<事務局：北條>

そういうご意見があったということは伝えておりますし、教育委員会の方でもやはり
同じような意見が出たと聞いておりますので、承認書交付の際にはその旨伝えております。

<西田委員>

再度確認なのですが、ここでの検討は、あくまでも相談であって、ここでの反対や賛
成で決まるようなチェック機関ではない訳ですね。

<事務局：北條>

決定はできません。ご意見を頂いているということです。

<西田委員>

参考にするだけということですか。前回色々話し合ったことを参考にするということ
ですね。

<事務局：中村>

附属機関なので諮問機関として最大限ご意見を尊重するということになるのですが、法制担当と厳密な確認をして、法律的に反対できないという結論が出ればそちらの方を優先したいと思います。

<西田委員>

活動の主旨が広く市民とともに原発について学ぶということなら、名前の中に意思表示があるということ、団体としてどう思われているのですか。それは聞いていないということですか。名前を変える事ができないのであれば、「原発をなくそう芦屋連絡会」というのは誰が聞いても原発をなくしたい、なくそうという運動だと思いますよね。そのようにみなさんとらえますけど。

<事務局：北條>

そうですね、名前のお話が出たという事をお伝えした時に誤解を生みやすい名前ですよということはお伝えしましたが、団体としてどう考えているかということまではお聞きしていません。名前を変えましょうか、ということにはなりませんでした。

<野村委員>

実際の活動の内容もありますが、名前というのはそういう意味では非常に大事、分かりやすくシンプルですね。この名前では、客観的に市民を教育していこうとか、原発を啓発していこうという主旨にはとれません。それをはっきり言わないと、そこが一つのポイントになっているという気がしますね。この名前を使うのであれば本当にそれが客観的な教育だけで終わる活動なのか、ですね。

<事務局：長岡>

教育委員会でも、社会教育委員の会の中で出たご意見はお伝えしました。教育委員会の委員さんの中にも、やはりちょっと気になるという、同じような意見は出ておりました。皆さんがおっしゃるようにこの会の名前ですね、「原発をなくそう芦屋連絡会」では明らかなになくそうなくそうとしている、目標はそこだと思っておりますが、そう考えているからといってこちらがそれをダメだということはできません。

あまりに過激になると、やはり公の登録団体ということで活動している以上はダメですということをお伝えしました。だからそういう場合、社会教育登録団体としてはダメですということが言えるので、よく注意しながら様子を見て、これちょっとひどいということになると、直接警告といいますか、こういう活動をされては困りますということで申し上げて、それでも改善されない場合は登録団体からの取消しということになるかと思えます。

教育委員会の委員さんの中でも、ちょっと名前も気になるし、明らかに反対されているっていうのは分かるけど、こういう会も必要ではあるのかなということはおっしゃっていました。勉強をしようという会ですので、みんなの楽しいことばかりされていたらそれはそれで良いのだけれども、こういうある意味社会的というか、皆さんの中で勉強するという会があるっていうのは良い事だという考えもあります。確かにこのチラシにあるように、防災安全課長が出向いて原発に関するような事をお話されたのですね。後のアンケートでも、まだまだもっと勉強が必要だという事や、やっぱり不安が大きいなどというような事でした。初めての試みだったみたいですが、さらに勉強していくというようなきっかけにはなると思います。今のところはダメですよということではなくて、注意しながら見守るというスタンスかなというところですよ。

<西田委員>

はっきりと意思表示した名前をつけて中身は違いますということなら、反対する団体が、原発を推進しようとして芦屋に原発をつくろう連絡会という団体を作って、原発を作るのではなくみんなで考える会です、電力消費や燃料について考える会ですよと言えば承認しないといけなくなると思います。そういう心配をしないといけないのです。だから中身は違うけど名前はすごく大きなファクターだと思います。名前だけ一人歩きして、例えば市民活動センターなどの施設で原発をなくそう連絡会の会議がありますとあれば、主旨としては原発を考えていますといっても、そこを通る人には、原発をなくす会議をしているんだな、そういう社会教育登録団体だなどと思われてしまいます。自由な意見や考えを持つことはすごく大事な事だし、原発が良いのか悪いのかっていうのを考えるきっかけになると思いますけど、社会教育登録団体としてそれがどうなのか、というところにこの前クエスチョンを出しました。だいたいみなさん感じているところは同じでしょうけど、立場上断れないから入るっていう考えでは歯止めがきかなくなるのではないのでしょうか。そんな方ばかりじゃないとは思いますが。

<安東議長>

法制担当の意見としては、どの辺から承認できないということですか。

<事務局：北條>

宗教はダメですね。規則にはっきり明記されているところとしましては、公の支配に属さない、営利目的でない、特定の政党の利害に関する政治活動を行わない、特定の候補者を支持する政治活動を行わない、特定の宗教、宗派、教団を支援しないなどということが明示されておりますので、原発をなくそう芦屋連絡会は該当しないということです。

<海士副議長>

例えばDVをなくす会とか、なくそうとか、いじめをなくそうなどは、反社会的であったり犯罪だから、なくそうというのは納得できますけど、原発をなくそうというのは考え方の違いなので、その辺が難しいと思います。「なくそう！」という言葉がついているから悪いということではないです。

<野村委員>

疑問が残るのは、政党の後ろ盾があるのはだめなんですよ。完全にどここの党は「原発はなくそう」だし、どここの党は「原発はなくさない」ですし、こういう考え方がベースにあるから政治的な思想が入るのではないかという意見が出てくるんですね。

<西田委員>

このチラシだけ見ると、原発をなくそう連絡会で、原発なくす講演会をやるんやな、市の防災安全課の課長が出られて市も応援してるねんな、原発をなくすことをしてるねんなという風に、芦屋市の方向性がそうかなと思われませんか。

<事務局：中村>

社会教育登録団体だからということでもなく、出前講座という形で防災安全課は講師を引き受けている訳ですけども、防災安全課も非常に躊躇したのではないかと思います。

<西田委員>

悪く考えれば、原発をなくそうというところで社会教育登録団体になって、公に認められて、芦屋市は行政も含めて意見が固まっている事になってしまいかねないですよ。我々も、それを認めたのだらうと言われてしまいます。議事録で、ちょっとおかしいという話が出たことはちゃんと出して頂いていると思いますが。

<金木委員>

芦屋市PTA協議会で原発の事を勉強したいと思っておりますが、偏りがあるのはPTA自体も組織として良くなく、勉強したいのだけどどこにお願いしたらいいのかものすごく悩んでるところです。でも、いい悪いではなく、ちょっと勉強したいというのはみなさん思われていて、そういう時に、おっしゃるみたいに、ここが社会教育登録団体だったら大丈夫なのだろうか、もしもお願いして中身が全然違ったらとても大変なことになるので、その辺もすごく心配ではあります。やっぱり社会教育登録団体というのがあれば、みんな信用してしまうと思うので、すごく心配がありますね。このチラシに関しては、防災安全課長さんをお願いすることが可能なのかと思いました。

<西田委員>

個人的には原発を賛成はしてないです。けれど社会教育登録団体としてどうかと思います。ここでどこまで決められるかとですけど。

<安東議長>

限界がありますよね。法制的な面から言うと認めないことはできない。でも、何か腑に落ちない。問題は、本当にずっと社会教育関係団体を認めて増やしていくという姿勢でよいのかどうかということでもあるかと思います。社会教育関係団体を認めていくという方式を続けていって、でもこういった問題が出てきたということですね。となってくると本当にこのやり方を続けていくべきなのか、もう少し問題が出てくるまで待つておくのか、あるいは今までの社会教育関係団体のあり方を考えなおして見るというチャンスではあると思います。

<金木委員>

すごく数が多くなって、すべて1つ1つ精査できて、断るべきは断るといった作業ができるのか、心配はします。継続していける団体なのかをきちっと精査できるのか。

<事務局：中村>

数的には300くらいであれば時間をかければできると思います。ただ多い多いとおっしゃっておられたので、一応阪神間の状況を調べてみました。芦屋市は公民館が市に1つしかないのですが、他市の大きな市においては公民館も地域で持っていて、社会教育関係団体登録という形ではなく、公民館登録という形でたくさん登録されておられます。芦屋市は公民館登録がないですから、同じ主旨の登録ですので、そこにおいては多いとはいえません。ただネーミング的に、社会教育関係団体登録は西宮市はいくつですかと言えばわずかです。でも公民館登録はすごくたくさんあります。内容はほぼ似通っていて、その公民館を基盤として、その地域の中で公民館事業の貢献を、社会教育の内容のような事業をされておられるので、そのしくみが違うということです。

<安東議長>

公民館ごとに登録を精査しているのですか。

<事務局：中村>

西宮市では、公民会を専属とする課が別にあるのです。中央公民館という課のような存在があって、そこが集約をしている訳ですけども、他市でもそうですし、全国的にも色々見てみましたが、存続してあるので、芦屋市は地域的に小さいので公民館をいくつも持

ってないというところで社会教育が引き受けているのだというふうに思います。

<安東議長>

芦屋市では社会教育委員が引き受けている、他市の場合は公民館やその運営委員ということですね。

<西田委員>

社会教育登録団体という事では他市は少ないですよ。公民館という制度があって、他市は確かに人口も多いし、公民館の数も多い。そして芦屋市は人口も少ないのに人口比率にすると多いんじゃないかと思えますけれど。それと精査されるのが、ここでやっておられたら300もあって、実際に何かあって辞めてもらった団体が過去にあるのでしょうか。最近、ここ4、5年くらい前から、やっと3年に1回の更新の時に名簿を出したり、他市の人と芦屋市の人が何人いたかというような事をきっちり見て頂くようになったと思うのですが、それは内容じゃなく、構成や会議がどんなものかとかいうくらいまでで、多分内容は見られないだろうし、うまく利用しようと思えば、書き方のうまい人はなんでもできる。そこまで言うとうまうまいもないと思うのですが、社会教育登録団体というのはただ他にここで受け付けただけではなく、後から広がるというような、市内の施設を使ったり、市内で活動するにあたって芦屋市の社会教育登録団体だという事がある程度重みがあると思うので、多いのが悪いとは言っていないですけど、いい機会じゃないかなと思います。こういう団体が増えてきたら、こういう団体が悪いとは言っていないですけど、こういう名前であったり、こういう色んなこと、何かしようじゃなしに、なくそうとかという団体が出てくると面白くないと思うのです。反対に反社会教育団体になるんじゃないかと。「何々するな」じゃなくて、「何々しましょう」という団体があつてほしいなと我々思うのですけどね。

<事務局：長岡>

一応、社会教育登録団体のもともとの芦屋の主旨が、趣味的活動でも良いというのが基盤になっています。社会教育というのを広く捉えて広げましょう、市民文化というのを盛り上げていきましょうというのがもともとの芦屋市の考え方だったので、それをずっとそのまま引き継いできています。ただ、おっしゃるように他の市だと公民館の登録グループがあるのですが、それも含めて、になっているんですね。どんどん時代の流れが変わってきて、芦屋市もそんなに財政的にも裕福じゃないという状況が出てきた時に、それで良いのかというところがあり、最近はやっぱちょっと違うんじゃないのかという社会教育委員のみなさんの中からのご意見もいただくようになってきておりますので、生涯学習課としてもそこは見直していっています。今おっしゃっていただいたような用件のちゃんとしたチェック、それに合わせて活動の内容もどういうことをしてられるかというのをもち

とこちらの方でも把握しないといけないということは意識しております、数が多いからいけないということではなく、それが社会教育ということの、みなさんに還元するということができているかどうかというのが、芦屋市の社会教育登録団体として求める団体はこういうのです、というのをもっと知って頂いて、それに合った活動をしていただきたいというがあるので、そこを分かって頂くということで、研修会をしたり、あるいは自分たちだけの活動ではなくて、他の方に還元するような活動はどういうことをして頂いているのかというのをご報告頂くように見直しました。今は少ないのですが、少なくとも年に1, 2回はそういう活動をして頂かないとダメですよということを言っていて、3年に1回が全面的な登録になりまして、前回の時にそういうご説明をさせて頂いて、次の登録までに1回もそういうことをしてないというところはもう次はできませんという事を今伝えていっているのです、少なくとも年に何回かはそういうことをして頂けるように、次の登録で認められるところにはなっているだろうなということをして今やっけていこうとしております、それをどんどん広げていくということで、本来の趣旨に近づけるというように考えているところです。

<西田委員>

この前の会議で出ていた、いわゆる社会貢献事業のことですね。

<事務局：長岡>

そうですね、それがまず始めにということです。

<西田委員>

1回認めると、何でもそうだと思うんですけど、辞めさせる方が難しいと思います。それでできるのですか。

<事務局：長岡>

一応、今ずっとご説明していて、1回できてないからダメだというのはなかなか難しいです。今、猶予期間が3年間ありますので、その度に今説明をしていて、今はしてくださいと言うんですけど、次の登録の時にそれができてないともう認められませんということを行っているのです、します。

<西田委員>

辞めさせるまでに6年かかるのですか？

<事務局：長岡>

3年です。初めに伝えて次の登録までに3年ありますから。辞めさせるのが目的ではな

く、社会教育活動をして頂くということです。

<西田委員>

6年たったら皆いなくなってますね。

<事務局：中村>

その他に、会から最低1人出席していただいて、芦屋市が求める社会教育登録団体というのはどうゆう活動であるかということ伝えるような研修を年に1回開いています。これまでと変わったところとしては、活動内容についても3年に1回求めるのではなく毎年どういう事をやったか報告を求めるなど、かなり本腰を入れて、私たちはきちんと確認させて頂いていますということ、前に出していこうとしています。先ほど西田委員が言われたように3年に1回で、急に言われて活動していなかったら次やめてくださいねと言うのでは、3年前のことは忘れてしまったりするかも知れません。毎年そのようにその都度言っていく機会を設けるようにしますので、その辺は以前とは形が少し変わっていくのではないかと考えているところです。

<野村委員>

今、考え方とかそういう話をしてはいますが、団体の基本的な動きを見る時に資金がどこから出てきているのか、本当にボランティアで資金を集めているのか、他からお金が動いているんじゃないかとか、そういうものによって政治色や、どこかにつながっているのかとかいうことがはっきりしますから、断る場合は断りやすいですね。考え方とお金の動きと両方からいくとはっきりします。

<安東議長>

認めるときの説明としては、例えば「行政に批判をするというようなことはダメだ」などといった話しをしているのですか。

<事務局：北條>

反対するというような表現は使わなかったとは思いますが、やはり過激な活動や、行動をするような事はダメだということは伝えました。その辺が確認できるように配布物を提出してくださいと伝えていきますので、今後そこは確認し、見守っていけるのかなと考えています。

<安東議長>

ここで審議しているのは社会教育登録団体だからですよ。例えば公民館でやるのであれば、ここでは審議はしないということですね。

<事務局：長岡>

今のところは芦屋市では公民会の登録団体というのはないですけど、登録団体でなくとも、公民館を使う時に政治色が強いなどということがあれば、公民館も同じような条件があるかと思います。今の時点で問題視するようなことはないと思います。

<安東議長>

社会教育登録団体を、例えば西宮市のようにいくつかの団体のみに絞ってしまう、そして他の団体を公民館に任せてしまうということであるならば、ここで話すのは一部の社会教育登録団体だけであって他の団体の事はここでは議論しないのですね。

<事務局：長岡>

公民館運営審議会になりますね。ただその事に、社会教育を総括する会議ですので、こちらの意見として言えるとは思いますが、最終的には教育委員会で、公民館運営審議会がどちらかという主としてということになります。

<西田委員>

他市と社会教育登録団体に対する考え方が違うということですか。

<事務局：中村>

他市でも社会教育登録団体がこのような形のところもあります。公民館で取り組まず、このような形でやってるところもあります。

<事務局：長岡>

阪神間ではどちらかという社会教育登録団体が少なく他の登録団体、公民館などの登録が多いかと思います。

<西田委員>

趣味のところも含めて、芦屋市としては社会教育登録団体だということですね。

<事務局：長岡>

過去の経緯としてそこが出発点だったので、浅く広くという考えで市民文化、社会教育を盛り立てていこうというのが根底にあったということです。

<西田委員>

それは今もそういうことですか。

<事務局：長岡>

根本的なものがすごく変わったということではないのですが、ただ時代の流れや市の財政状況などもあります。社会教育団体としての趣味の団体を否定することは全くありません。頑張っていたきたいと思うのですが、それが芦屋市の社会教育登録団体としてどうなのかという考え方は、今社会教育委員さんの中からご意見を頂いていることもありますし、いろいろなことを考えて、狭めるというのはおかしいですが、もう少し自分たちだけじゃなく、広く活動して頂ける団体として今は考えています。そうあって欲しいということです。

<西田委員>

それを社会教育登録団体の皆さんにちゃんと周知しないと、市が認めているのに我々がだめと言う訳にはいかないです。財政は別だと思えます。例えば社会教育登録団体としては認められるけど、お金がないから免除や今までどおりの3割減免はできないのでみんなで頑張ってください、豊かになったら又応援しますということです。優先順位が社会教育登録団体にあるのか、福祉にあるのか、それは市の考え方ですし市民の考え方です。でも社会教育登録団体の芦屋市の考え方がどうであるかというのはぶれないで頂きたい。変わるのであれば変わるということを周知してください。

<事務局：長岡>

そうですね、それは研修会で毎年ずっと、この前始まったところですけど、行っています。

<西田委員>

それを誰が決めて誰が変えるかですね。

<安東議長>

ここで提言はできます。

<西田委員>

社会教育登録団体の方針だとかを説明するときに言われているというけど、急に言われても誰が決めているのかなと思います。それは教育委員会で決めているわけですか。

<事務局：長岡>

素案としてはこの会議で頂いた意見を元に担当課が考えてということですね。最終的にはもちろん教育委員会にも承認を得ないといけないということにはなります。ご説明して

ということですね。

<西田委員>

この会でもう少し狭めた方がいいということであれば狭める方向で、広げた方がいいということであれば広げるということですか。

<事務局：長岡>

そうですね, 意見として頂ければそれをもとに考えなおすということになっているかと思えます。

<西田委員>

我々の意見というのは責任が重たいので我々の意見をちゃんと考えないといけない, ある程度皆まとまれば尊重してもらわないといけないですね。

<安東議長>

皆さんいろいろな団体から来られているので, これに基づいてご意見を言ってもらえればそれを提案として上に持っていくことはもちろんできます。

<西田委員>

我々のほとんどが1年目ですので色々教えて頂きながら考えていかないといけないです。社会教育登録団体がどんな団体が登録しているのかという今の実態というのが, 身の回りのことは分かっているのですが, こんな団体もいるなというのが分からないとなかなか・・・。数が多いからとか, 少ないからとかは言えないと思うので, 本当に社会教育登録団体として市が目指している, 我々が了解できるような団体がたくさんいるのであれば, そんな素晴らしいことはないと思うのですが, その実態も分かっていないのは, ちょっと残念ながらここにいる人間としては恥ずかしいのですけど。

<事務局：長岡>

細かい内容まではお見せできていないのですけど, ホームページでは全団体アップされていて, 名称とか活動の簡単な説明とか, 代表者の方の連絡先も, 基本はホームページに出しています。中には連絡先は自分の番号なので困るという方もいらっしゃいますが, 了承, 了解を得た上で代表者の方のお名前とか連絡先を出していますから, それを見られてこういう活動がしたいと思われる方は, その方に連絡して頂くことが可能ということをしております。広く皆さんに開かれた団体であるというのが条件の1つですので。みなさん出さないという方はまずあまりいないですね, 代表者のお名前, 連絡先ということでは。

<事務局：北詰>

半数くらいは代表者の連絡先は載っています。

<安東議長>

この件については様子を見るということでよろしいでしょうか。

<事務局：長岡>

委員のみなさまも注目して頂いて、ちょっと問題じゃないか事があればおっしゃって頂いたらこちらの方でも調査などして対処したいと思います。よろしく申し上げます。

<安東議長>

それでは、続きまして議題4について事務局から説明をお願いします。

<事務局：北條>

10月4日の教育委員と社会教育委員の意見交換会お疲れさまでした。ありがとうございました。そこで出た意見を簡単にまとめさせて頂いたのが添付しております主な意見です。1～5までありまして、学校と社会教育の壁、クラブ活動のお話、地域行事への参加率、芦屋市の参加率が低い、地元愛が足りないというお話、インターネットをもっと社会教育に利用できるのではないかという芦屋川カレッジを例にしたお話、PTA役員さんの次期継承の問題、社会教育ボランティア活動、社会教育としてのPTAというお話、最後に教育長の方から人間力、地域力の向上についてというようにお話がありました。お休みされていた守上委員には簡単なまとめで申し訳ございません。せっかくこのように教育委員さんとお話できましたので、こういったものを参考に、今期のこの委員の皆様で研究テーマのようなものを決めていってはどうかなと思います。ご意見お願いいたします。

<安東議長>

会のあり方についてのご意見いただければと思います。

<西田委員>

スポーツを通じて街づくりを考えていく中で少子化高齢化というのはスポーツの現場でもシニア年齢のスポーツする方が増えています。サッカーとか野球とか、団体スポーツをする子どもたちが、だんだんチームができなくなっていて、反対にグランドゴルフなどはかなり増えてきて場所がないのでたいへんになっています。それはそれで各年代のスポーツが充実していくということで良いと思うのですが、その中で一番問題になっているのは、中学校の部活動です。中学校の年代というのは、学校単位でないとなかなかチームは組めないのです。なくなった部活動も多くなっています。子どもが少なくなっ

なくなった場合と、少子化によって先生が足りなくなり、指導者が少なくなったという場合があります。体育協会としては、学校体育も含めて地域スポーツということを考えていきたいのですが、学校の先生には理解して頂く先生と学校は学校だけでやりたいという先生がおられます。これは競技によって違うんですけれども、サッカーとかラグビーというのはヨーロッパ型のスポーツで、日本の文科省が出している地域スポーツクラブというのは、たぶんドイツの地域のスポーツクラブをモデルにしていると思います。地域社会体育というか、地域に市のグラウンドや体育館があり、そこで学校が終わってからみんなで集まってスポーツする、指導者を地域で養成をして、先生ということではなくスポーツをしている人が養成していくということでもかなり進んでいます。日本はそうではなくて、中学校のすごくよいところがあったんですけど、少子化になってきて弊害が出ているということなので、地域の中に60歳くらいの方で元気な方がたくさんいますから、そういうリタイヤして、時間があって、指導経験のある方とうまく共働して、小中学校のスポーツの活動を活性化できないかなと今相談しようとしています。中学校のカリキュラムをいただいてやってきていますが、芦屋市は小さい町なので、みんなでまとまって力を合わせればもう少し良いものができるのではないかなと思っています。その時にPTAの方にもお願いしたいのですが、親御さんは中学校単位で考えて、うちの中学校はなんでそんな指導者がいないのかとか、なんで先生がいないのかと言われますが、先日もある中学校の部活動に指導者がいないということで、体育協会から派遣しました。その顧問をされてる方は全然その競技と関係ない方だったので、そういう方にとっては、英語ができないのに英語の先生をしろというようなものです。それを先生という枠組みを超えると地域の中に指導できる方がいるのではないのかと。そういう事を学校、地域、親御さんも含めて一緒に子どものスポーツに何ができるかということを考えて、街づくりにつながればと思います。

<野村委員>

社会教育委員の中でテーマにするには何がいいのか、一番その辺の考える必要があると思います。芦屋川カレッジの活動をよりたくさんの方に知らしめるという事がありますけれど、一つはホームページを持っていますし、検索しようと思ったらできることはできるんです。学友会内部でも委員の方といろいろ話しをしたのですが、学友会には700強のメンバーがいます。そのメンバーも卒業年次（各期）ごとの卒業生のつながりが強くてそこで同好会を作って運営しています。今やろうとしていますのは縦構成といいますか、例えばテニスとかゴルフとか、各期にまたがって学友会としての大きな活動ができるわけです。その中の1つにACパソコンクラブというのがありますが、それがやっぱり各期にまたがってやっていて、かなり一般の方が入っておられるんです。そういう風に各期にまたがりますと、自分たちの仲間がもっと拡大して一般の方が入ってこられても割とすんなり入れる、そんな活動ができてきているので、そういうものをニュースなどでもPRして増やしていこうという風にしていきます。ちょっと話がとぶかもしれませんが、私は山登り

もやっているんですが、この集まりがどこから発生したのか聞いてみると、公民館のハイキング同好会から発生してネットワークができあがっていて非常に面白いし強いです。他の事ももっとネットワークを広げていくと、それがその次の学校教育に影響を与え、さらに拡大していけばネクストの対応が出来あがってくるんじゃないかと思います。今のところ、実際エイジが高い方に、組織に参加してやってもらうのは実はなかなか大変なのです。今そこが一番悩んでいるとこなんですけど。みなさん、やる気十分なのでそういう活動も徐々に広がっていくんじゃないかと思います。いろんなところに出ましても、「私のお父さんはカレッジの卒業生です」と言う話しはよく聞きますし、もっと広がり強く大きくできるんじゃないかという気はしています。

<金木委員>

私が一番心配しているのは、子ども会なり自治会なりPTAなどで、ボランティアを経験されていない方が増えている中で、ますます社会教育のために協力して下さる方が減ってくるだろうなということです。親がそういうところに参加しなかったら、絶対子どもは参加しないと思うので、一回どこかで子どもたちにそういうことを教えるしくみが必要なんじゃないかなというのを思うんです。そこが学校現場になればいいというのが保護者の中でもあって、ずっと続くと学校も大変なので、1回しくみを作ってしまったら、そこから後は又社会教育団体なりが請け負っていくというか、そういう形がとれたらいいのかなとぼんやり思っているんですけど、先日来られていた教育委員の方もほとんどがPTA出身の方だし、守上さんもそうですけどコミスクの委員長さんたちもPTAの役をされてた方も多いです、自治会でもそうです。そういう方がどんどん減ってくるのかなと心配です。子供たちが社会に出ていく時に、ボランティアの精神がなくなってくるんじゃないかな。後で説明しますが、私の中学校の精中応援隊では、保護者も学校も地域もつながって、子どもたちも大人の背中を見てもらおうかなというようなところを大きな主旨としてボランティアの組織を立ち上げています。もっともっといろいろなところと連携してくれたりいいのにと。まだまだ知らないことも多いので、いろいろな事を勉強して顔みしりになって連携していければいいなと思います。

<海士副議長>

ウェブの、例えばユーチューブ等の動画を活用して、学校のボランティアでどんなことをしているのか、こんな活動していますよ、という広報をすれば、わかりやすいので、そのお手伝いなら、活動センターで登録して活動されているところなどもありますので、そういうところだったらご紹介しますというお話をしました。皆さんの広報の仕方というのはどうなのかなと。今度、市民活動センターで市民団体の広報の仕方という講座や会議を持つことになっています。自治会など、広報は必要ないというところも多いですが、そうではなく、次の世代を育てたい、次の世代にバトンタッチしたい、と思っても、自分たち

が何をしているのかが分からないと誰もしてくれないですよということです。それぞれの団体のやり方とか内容は違いますけど、活動の広報をしましょうというのをやります。その辺で、この委員会で何をテーマにしていくかというのが、それにあてはまるかわかりませんが、地域にいろんなことを知らしめていくようなことをどうしたらいいか、というのは1つどこでも共通していることです。知らしめるということは結果的にそれをやってみようという人を増やすということです。それと、学校の子どもたちにボランティアを教えたいということだったんですが、今度尼崎の教育委員会の方で今年先生になられた方が社会体験されるそうです。社会体験の中には企業に行かれるところもあって、トライアルワークみたいですね。ボランティア活動に行かれる方もいらっしゃるということで、社会体験の意味と効果とか、社会に参加することにつながるということは是非先生に体験してもらわないと、子どもたちを教える先生が、ボランティア活動や社会体験が全くないと、その良さとかすばらしさとか大事さとかを話すことが難しいと思います。

学校と学問だけの世界じゃなくて、一般の社会を少し体験してもらうことは、良いのではないかと思っています。そういうしくみというか、先生を含めて学校が子どもたちにどうしていくかっていうのは非常に興味ありますね。

<金木委員>

芦屋では先生方の社会体験が少ないのを懸念されている、民間に勤めている方と先生方の意識の差を気にされている保護者の方がすごく多くいます。かといって保護者がみんないろんなことができていないわけではないのですけど。公立の先生の方が保護者も子どもたちもすごく話が通じにくい気がするので、すごく興味があります。

<安東議長>

守上委員、前参加されていないですが、今の話をお聞きになられて何かございますか。

<海士副議長>

この前の結果とかご覧になっていかがでしょう。

<守上委員>

ネットワークを作るというのが出ていますが、昨日地域福祉課での話し合いに出ていまして、一人一役運動をしようという話なのですが、いろいろな意見が出てくる中で、そういうことは生涯学習課でやっていますよ、ということはあるんですが、そうなんですか知りません、となるんです。同じようなことを別々の課でやっているけど、実際には連携した方がいいことがある。その辺も、もう少しネットワークをきちんとした方がいいんじゃないかと思います。先ほどの和歌山の話でも、家庭を助けに行くのですが、福祉の分野なのか教育の分野なのか。結局どちらも一緒にやらないといけないんじゃないかなと思います。

した。

<金木委員>

学校ボランティアにしても、学校に入るけどボランティアや社会教育団体になるので学校教育課ではなく生涯学習課の管轄なのか、でも学校に入るので、もう少し学校教育課にも絡んでほしいなと思っています。すこしずつ壁も取り払われているとは思いますが、まだまだネットワークができていないように感じます。

<安東議長>

感じているのは情報がうまく流れないというのが一番大きな問題となっていることです。初めから全体というのは無理ですから、突破口として、どこかを、地域としていろんな社会教育団体などいろんなところを結んでどうネットワークを作っていくのか、そこでどういったことができるのかというモデルのようなものを作って、それが成功事例としてできればいろんなバリエーションが広がっていけるのじゃないか、その突破口、ネットワーク作りをする拠点の一つを作って、しくみができればいいなと思っていますが、それを具体的にどうやっていくのか難しいところです。今見せてもらっているのは、応援団とか去年も小学校でやっていたところも一つのポイントで、そういったところをもっと広げていって、いろいろな方が地域を巻き込んで何ができるか、あるいはスポーツも絡んできますから、うまい具合に情報が行きかうことができるようなそういったしくみがあるのかなと思います。

<海士副議長>

まずは市役所の中のネットワークを考えていただきたいと思います。相談窓口が違って、こことここここに同じことを言ったのに、話に通じていないということが、あります。まず市民レベルで、トークレベルで、自分たちがいろんな人をまきこんで動かししょう。でもそれはいずれ行政に声を上げることによって協働し、一たす一が二以上のものができるのではと思います。

<西田委員>

市の中のネットワークができていれば市民もできると思うのです。市民活動センターでいつも言っているのですが、行事の参加率を見ても、情報がなかっただけで、本当は参加したい人もいっぱいいると思うのです。市民レベルでも同じようなこと、例えば駅伝にしてもライオンズがやっているとか他の団体がやっているとか言わず、一緒にやったらいいと思います。それはちゃんと情報公開したらいいし、主催者が違うからとか、あの団体がやっているからうちはやらないとか、市民もそうなってきたてしまっています。それは行政が悪いのか市民が悪いのか、本来は行政がそれはやっているところがあるから協力したらと言うべきです。例えば障がい者スポーツは福祉課担当なんです。でも我々は教育委員会

の管轄なのですが、障がい者のスポーツを支えるのに我々だけではできません。今スペシャルオリンピックスという知的障がい者のスポーツとして3つのプログラムをやっているのですが、それを障がい者の介護の人達がサポートしながら、サッカーを教えるのはサッカー協会から、テニスを教えるのはテニス協会から派遣するというようにして、一緒だからできる、一緒にならないとできないんですよ。ネットワーク作りというか、芦屋の街を作る中で、スポーツをしているからスポーツのことで言うと芦屋市体育協会ですから、みんな地域に住んでいる人たちなんです。ということは皆関わっている、いうわけですよ。スポーツをやっているときはその顔しかしていないけど、情報交換をちゃんとすれば、あの人がやっているのか、子ども会にもいるわ、とかコミスクにも入っているわ、とかいう仲間がいるのにその情報交換ができてない。それを行政の窓口として、どこがどうするかなんですけど、生涯学習課だけではできないと思います。行政の方のネットワークを横にちゃん整備とするのと、市民団体もちゃんと横にネットワークするのは市民活動センターの仕事ではと思いますが、好き嫌いがあるからなど、なかなかうまくいかない。芦屋は神戸市の東灘区より狭いですが、芦屋ぐらいの広さがちょうど良く、スポーツで例えて言うと多世代でないと、切れてしまうとどこかにいっちゃうんです。先生の役目、地域の怖いおじさんが文句を言う役目、お母さんが助ける役目などがあると思うんです。ボランティアも義務になってしまうと人間いやになってしまいますよね。しないといけないからではなく、ボランティアをしているというのはその活動に参加していることだと。そこでそれを楽しまないといけないと思うんです。みんなが同じことをやらないといやで、スポーツをずっとやっていると、保護者会というのがあって、初めはみなさんができることを助けてくださいということで始まったのが、当番になって、同じことをやらないといけなくなっています。冬の寒い時にお母さんが働いているからおばあさんが来ている。誰かがすることは、PTAもそうではないかなと思うんですけど、同じことをしないといけない。それぞれの事情によって、来れる人も来れない人もいる。できる範囲の中でみんなができることを認めあうというのがないと、ボランティアは続かないし、義務になって負担になってくると思うんです。自分の生活があって余った時間をどう地域に還元するかということ、もう一回見直さないといけないのかな。よそから来た人が、地域のサークルや会に入れる環境があるか、既得権があって、もう入れない、もういっぱいだからだめだ、というのがいろんな団体にあると思うんです。芦屋川カレッジなどはわりと入りやすいと思いますけど。新しく来た団体も受け入れるような環境がないといけない、そういう環境を作っていかなければならないと思います。芦屋で子どもを育てているのは芦屋で育てほしいから、芦屋で育った子が世界に出ていってくれたらいいと思うんです。でも今、芦屋市というのは、成功した人が芦屋に来る、というようなイメージがあると思うんです。それもあっていいと思うんですが、芦屋に住みたいなと思ってもらったらいいなと思うんです。よく言われるように、世界一住みたい町になってくれたらいいと思うんですけど、住みたい価値の元は、芦屋で育ったという、子育てをしてその子どもたちをちゃんと育て上

げられる町が原本だと思うんです。

<安東議長>

これが最後ということではなく、意見を出してもらって、この会で話し合うべきこととこののをやっていきたいと思いますのでよろしくお願ひしたいと思います。以上ですべての議事は終了いたしました。

以 上
